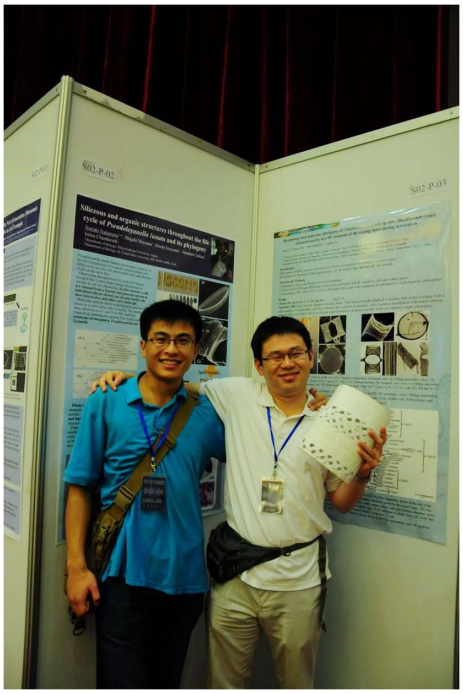
中村憲章：第 23 回国際珪藻シンポジウム（2014 年 9 月 7 日～ 12 日，中国，南京）に参加して

私は今回のシンポジウムに参加することで，珪藻でつながる世界を知った。

シンポジウムにおいて，私は「Siliceous and organic structures throughout the life cycle of *Pseudoleyanella lunata* and its phylogeny」という題目でポスター発表を行った。*Pseudoleyanella lunata* は Cymatosira 科に属する海産の二極性中心珪藻である。その原記載において，*P. lunata* は *Leyanella arenaria* と類似した構造を持つ。しかし，異殻性を持たないこと，非対称の殻形，糸毛と管状突起が殻に存在しないことで異なる属とされている。私は *P. lunata* を培養し，生活環を通して観察を行った。その結果，殻形の変化や精子形成の過程，増大胞子形成後の細胞の異殻性が明らかになった。これらの構造観察に加えて，分子系統解析の結果から，*Pseudoleyanella* は *Leyanella* の新参のシノニムとすべきとの結論を得た。さらに，*P. lunata* の殻の内側に存在する有機膜“diatotepum”の全体像の観察から，それが半被殻の構造をよく反映するものであることが明らかになった。また，本種の diatotepum を無縦溝珪藻 *Psammoneis* sp. の diatotepum と比較した結果，胞紋の真下の部位で構造的な差異が認められた。

ポスター発表では私の研究内容に興味をもたれた著名な先生方から多くの助言をいただいた。さらに，持参した殻の構造模型についても多数のお褒めの言葉をいただいた。特に，珪質鞭毛虫の構造を模型を用いて発表されていた Kevin McCartney 博士は「これからの構造研究においては君のように立体的なモデルを作成することが必要だ」と，励ましてくださり，私はとても誇らしい気持ちになった。また，国際珪藻学会会長の Regine Jahn 博士には diatotepum の働きについて，私の思い至らなかった可能性を指摘していただき，研究に新たな視点を加えることができた。先生方はどなたも優しく，分け隔てなく私にもアドバイスをくださり，研究者を目指す私を応援してくださった。そんな先生方のようになりたいと改めて研究への意欲が沸き上がった。

このポスター発表の時間だけでなく，シンポジウム全体を通じて私は多くの参加者と交流をもつことができた。その際に思い出したのは 2013 年沖縄の日本珪藻学会研究集会で真山茂樹先生がおっしゃった「私たちは共通言語を“珪藻”とする Diatomist である」という言葉である。今回の IDS の発表内容は多様であったが，



発表ポスターの前で，Li 君と著者（右）

Patrick Kociolek 博士の Species Flock に関する発表などで，国籍や文化の違う国の人々の間で熱い議論が行われたことが印象的であった。中にはイランやトルコ等の国で珪藻研究のパイオニアとして活躍されている方もいた。そんな先生方の持つ研究への熱い思いは，私にとってたいへん刺激的であった。そして，開催国中国の学生とは短い期間ではあったが多くの言葉を交わすことができた。特に Peilin Li 君と Mengjie Yu さんの二人と深い友人関係を結べたのは何よりであった。これらは言語も文化も関係がなく，“珪藻”を通して得られた関係である。世界の珪藻研究の最前線を知り，多くの人と知り合えた今回のシンポジウムは，私の今後の研究だけでなく人生においても代えがたい経験となった。

最後になるが，本シンポジウムへの参加に際して，国際珪藻シンポジウム東京大会記念基金より多大な助成をいただいた。この場をお借りして厚く御礼を申し上げる。

中村憲章：〒184−8501　東京都小金井市貫井北町 4–1–1　東京学芸大学大学院生物学コース
Noriaki Nakamura: Department of biology, Tokyo Gakugei University, Nukuikita-machi 4–1–1, Koganei-shi, Tokyo 184–8501, Japan